

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月12日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520069

研究課題名（和文）心身障害児巡礼運動から生まれた「共生の思想」の現代的意義および可能性の研究

研究課題名（英文）A study of an idea of coexistence developed through the handicapped children's pilgrimage movement

研究代表者

寺戸淳子（TERADO JUNKO）

専修大学・文学部・兼任講師

研究者番号：80311249

研究成果の概要（和文）：

「共生」の問題への取り組みの具体的事例として、心身障害児巡礼の歴史・理念の研究、および、教皇庁の生命倫理問題への対応と社会（労働・貧困）問題に対する対応との違いの分析を行い、次の二点が明らかになった。（1）知的障害児を産み育てる決断は、「市場経済倫理」に反する「家族（贈与関係）」の決断に関わる倫理として現れる。（2）心身障害児を支援する活動は、市場経済社会における「正義」（現行の経済倫理）を問い直すもの、社会問題への対応は現行の経済倫理に照らした「不正」との戦いの理論化である。

研究成果の概要（英文）：

We treat with the handicapped children's pilgrimage movement as a field of practical experience of the idea of coexistence, in order to clarify its significance and potential. We analyze: history of this movement and its leading idea; significance of the difference between the Vatican's stance on bioethics and its critical posture toward the liberation theology. The following two points become clear: (1) when a decision to live with handicapped baby is made, this 'bioethical choice' is regarded as 'family affair (gift exchange)' contradictory to 'economic ethics'; (2) the movement that pursues to support handicapped children contest the actual economic righteousness, while the liberation theology aims to theorize a struggle against the economic injustice.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学、倫理学、共生社会、巡礼運動、障害者、カトリック、フランス、社会問題

1. 研究開始当初の背景

カトリックの聖地ルルドに生まれた「傷病者巡礼」を研究する過程で、第二次世界大戦後

に生まれた心身障害児を支援するさまざまな巡礼運動が、現代社会における重要な課題として認識されつつある「他者の困難な生に

いかに向き合うか」という「共生」の問題への具体的な取り組みにとどまらない、思想的な可能性を持つものであることがわかった。また、既存の研究には、障害者を取り巻く状況について宗教的立場からなされる提言や共生のヴィジョンの検討、宗教的世界における人間・世界観と「障害者」という存在との関係の研究、カトリック世界が展開した経済・労働問題の領域における「連帯」思想と「傷病者・障害者を対象とした連帯・共生」の比較をした研究などはなく、その必要性が認識された。なお、主体・所有概念を問い直すことで「共生」の問題を考察する研究としては、立岩真也氏の一連の研究が自己決定権（主体の判断能力と主権に基づく議論）を批判的に論じており、参考になった。

2. 研究の目的

「障害者」という存在を核とした人間・社会観の思想的展開と、その今後の可能性を考察するため、

(1) 心身障害児巡礼の歴史・理念を調査・分析する。

(2) 心身障害児巡礼が生命倫理をめぐるカトリック教皇庁の態度・動向（〈保健従事者の司牧的補助のためのヴァチカン評議会〉と〈生命アカデミー〉の設立、生命倫理に関する公式見解の発表など）に与えた影響を調べる。

(3) 現代カトリック教会内部に生まれた、もうひとつの重要な社会問題への取り組みである「解放の神学」（南米で生まれた、社会・経済的不正の解決を目指す司祭たちの思想・実践的活動）に対する教皇庁の対応と、上記(2)を比較することで、「経済・貧困問題における連帯の必要性を説く提言」と「病や障害を追った社会的弱者との連帯に対する提言」の相違を調べる。

このとき、

① ルルドの傷病者巡礼の発展過程で生まれ、巡礼世界の参加者に求められるようになった「ディスポニブル disponible[「空きがある、処分可能」を意味し、無関係な他者の求めに即座に応答する心身の構えをさす]という規範との関わりに注目する。その理由は次の二点である。第一に、理解不可能な「他者」に対する態度を規定する「ディスポニブル」は、集団内における「非対称な立場（平等ではない、立場の違い）」を積極的に評価する態度を生むため、「アイデンティティ・ポリティクス」と「共生」をめぐる議論に新しい展開をもたらす可能性がある。第二に、「ディスポニブル」という応答的態度を評価することは、「自律性」や「主体」の観念に認められてきた価値の再考を促すため、生命倫理の議論において、

「主体・主権・私的所有」の観念に基づく「自己決定権」とは異なる、思想的立脚点を提供する可能性がある。

② 他者の困難な生に向き合う態度・思想の研究に役立つ、「利他」概念以外の分析枠組みの可能性を検討する。これは、「利他」概念を用いた場合、「動機付け」をめぐる議論に終始する傾向があるためである。

3. 研究の方法

研究は実地調査と資料分析からなる。

(1) 実地調査の対象

- ① 2011年4月20～25日に実施された知的障害児巡礼〈信仰と光 Foi et Lumière〉。本巡礼は、1971年以来、10年に一度実施されてきた。前回2001年までは全世界規模で行われていたが、今回初めて大陸・地域ごとに実施された。4月にフランスで行われた巡礼のパリ・グループ（創設者の一人であるマリー・エレーヌ・マチューと同じグループ）と、10月8～10日に日本で行われた〈信仰と光〉アジア・グループ（香港からのグループと合同で行われた。当初は韓国・台湾も参加の予定だったが、原発事故の影響で不参加となった）の巡礼に参加した。
- ② 〈信仰と光〉の主催団体である、〈障害者キリスト教事務局 Office chrétien des personnes handicapées〉と〈ラルシュ l'Arche〉共同体（知的な障害を持つ人と健常者が、カトリック精神に基づいて共同生活を行うグループ・ホーム活動。トロント、パリ、静岡の共同体を調査）。
- ③ 関東地方（浅草、多摩、保土ヶ谷）で行われている〈信仰と光〉の定例会（それぞれのグループが月に一度行っている）。

(2) 資料分析の対象

- ① 上記団体・活動の関連資料（会報、映像資料、出版物など）と、創設者・関係者の著作（〈障害者キリスト教事務局〉創設者マリー・エレーヌ・マチュー Marie-Hélène Mathieu、〈ラルシュ〉創設者ジャン・ヴァニエ Jean Vanier を中心に、〈ラルシュ〉でボランティアをしたスタッフの手記など）。
- ② 教皇庁の生命倫理をめぐる活動・発言の関連資料（教皇庁の定期刊行物、公式文書など）、および、カトリック系の生命倫理関連資料。
- ③ 教皇庁の社会・経済倫理をめぐる活動・発言の関連資料（同上。特に、「社会教書」と呼ばれる回勅や書簡、なかでも、上記ジャン・ヴァニエと親しく、〈保健従事者の司牧的補助のためのヴァチカン評議会〉と〈ヴァチカン生命アカデミー〉を創設する一方で、解放の神学に対しては

否定的な態度をとっていた前教皇ヨハネ・パウロ二世の指示により2004年にまとめられた『教会の社会教説綱要』と、その関連資料)、および、「解放の神学」と「社会的キリスト教」の関連資料。

4. 研究成果

当初、心身障害者を支援する運動・霊性と「解放の神学」の違いは、生命倫理と経済倫理という関係領域の違いと予想していた。だが実際には、前者は「『正常な』市場経済社会に知的障害者の場所はあるのか」という問いを中心に、市場経済社会における「正義」（現行の経済倫理）の是非を問い直すものであり、後者は「『異常・暴力的な』経済的搾取」という、現行の経済倫理に照らした「不正」との戦いの理論化であった。

以下、(1) 知的障害者の問題を通して見えてきた生命倫理と経済倫理の関係、(2) 教皇庁の対応を通して見えてきた生命倫理と経済倫理の関係、の二点を成果として述べる。

(1) そもそも現代社会において、生存権は「貨幣尺度による個人消費の水準の保障（消費生活の権利）」として構想されているが、〈ラルシュ〉の活動は「知的障害者の『生存権』は果たしてそれによって保障されるのか」と問い、「家族」と呼ばれる場の提供によってそれに答えようとしている。その「家族（〈ラルシュ〉）」に参加しているボランティア・スタッフは、この活動に参加するメリット（他者からは「デメリット」とみなされるが）として「社会＝経済活動からの一時的離脱」を語る傾向があるが、そこで求められるのが「ディスポニーブル」という規範であり、ここに「市場経済社会」と「ディスポニーブル」の二者択一が窺われる。他方で、自身の子も知的障害をもつ哲学者のジュリア・クリステヴァは、〈ラルシュ〉創設者ジャン・ヴァニエとの往復書簡集の中で、「(この市場経済社会の中で、家族でもない) あなた方が、なぜ、どうやって、知的障害者と『仲間』として生きる選択をし、なぜそれが実現できているのか」と問うている。これは両親が下す「産む・育てる」決断とは別の、無縁な他者による「共生」の決断の動機を問うものであり、ここに明らかなように、生命倫理は「家族の決断」の領域を形成してきた。その決断を下した家族には、社会的な子育て支援のような支援の要請をためらう傾向があるが、それはそこに「経済力を担う次世代の育成」という見返りが無いからと考えられる。すなわちそれは「贈与の関係」と見なされ、無縁のものたちがディスポニーブル（市場競争原理とは別の原理）を規範とすることで作られる〈ラルシュ〉という共同生活の場は、「贈与」という点で家族に類比されていると考えられる。このように、いわゆる「生命倫

理」の領域は、実際に問題に直面する当事者の具体的な生においては、「経済倫理」の領域に関わっていることがわかった。また、「利他」概念に替えて「贈与」概念を用い、「家族的関係（贈与）」対「経済的關係（市場経済）」という枠組みの中で「共生」の問題を検討することによる、議論の展開の可能性が示唆された。なお、生命倫理問題をめぐる教皇庁の公式見解でも、「生産性至上主義」という観念で同時代の経済優位社会が批判され、「非生産性」や「貧しさ」の観念を用いながら、立場が違う者たちの「共生」の道が模索されており、ここでも「経済的關係」の相対化が主要なテーマとなっている。

(2) カトリック教会世界（教皇庁と平信徒活動）は、19世紀以降、「社会的カトリシズム」という形で社会問題への取り組みを強化してきた。それは労働問題（搾取）という「不正」の解決を、「中間団体」という連帯の形の復興を通して目指す、政治的活動であった。そこでの原則は「私的所有権」という価値（正義）の擁護であり、20世紀以降は共産主義との戦いという側面が強まっていった。このため、マルクス主義を分析概念として用いながら資本主義システムの不備を批判する「解放の神学」に対し、強調庁は否定的な態度をとってきたと考えられてきた。他方で、生命倫理の領域では、教皇庁は「私的所有権」という原則に基づく議論に対して、異議を唱える立場をとっている。このような、「私的所有権」をめぐる全く異なる態度・判断が、教皇庁の「病・障害をめぐる連帯」と「経済的問題をめぐる連帯」への対応の違いを生んでいると考えられ、「私的所有権」をめぐる研究のあらたな課題が明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 寺戸淳子『『奇跡の聖地』の語り方』『社会人類学年報 vol136』東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、2010年、pp. 55-78.（査読有り）
- ② TERADO Junko “Qui est mon prochain ? La construction du lien social dans les activités des Hospitalité de Lourdes”, in *Revue d' Histoire de l' Eglise de France*, tome 96 (n.237), Société d' histoire religieuse de la France, 2010, pp. 489-505.（フランス教会史を専門とする学術誌の創刊100周年記念号で、外国人によるフランス教会史研究の特集号。査読有り）
- ③ 寺戸淳子「正義と配慮—近代フランス・カトリック世界における倫理的活動の展

開一」『宗教研究 83 卷 2 号』日本宗教学会、2009 年、pp. 263-287. (査読有り)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 寺戸淳子 「『障害』のキリスト教的意味」
日本宗教学会第 70 回学術大会 関西学院大学 2011 年 9 月 3 日
- ② 寺戸淳子 “ Justice and care :Development of Ethical Actions in the Modern French Catholic World”
第 20 回国際宗教学宗教史会議世界大会 トロント大学 2010 年 8 月 20 日
- ③ 寺戸淳子 「正義と配慮」日本宗教学会第 68 回学術大会 京都大学 2009 年 9 月 13 日

[図書] (計 1 件)

- ① 寺戸淳子 「〈証し〉と〈開示〉—聖地ルルドの映像化にみる『苦しむ人々』の伝え方—」新井・岩谷・葛西編『映像にやどる宗教 宗教をうつす映像』せりか書房、2011 年、pp. 71-86.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺戸淳子 (TERADO JUNKO)
専修大学・文学部・兼任講師
研究者番号：8 0 3 1 1 2 4 9

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
研究者番号：